

## 第 1 回世田谷区総合教育会議

日：平成27年5月25日（月）

場所：世田谷区役所第一庁舎5階庁議室

午後 3 時31分開会

事務局 それでは、これより平成27年度第 1 回世田谷区総合教育会議を開催させていただきます。

保坂区長 それでは、総合教育会議の開催に当たりまして、私、世田谷区長、保坂から御挨拶を差し上げたいと思います。

まず、教育委員の皆様方、お忙しい中、御出席ありがとうございます。この総合教育会議は区長部局で開催しており、教育委員会のそれぞれの幹部職員、担当も参加をしての開催ということになります。

総合教育会議は、先般の地方教育行政の組織及び運営に関する法律の改正に基づいて開催をするということであります。これまで区議会等でやりとりがありまして、私としては、教育行政の独立性については引き続き尊重させていただきたいと考えているところであります。これまで教育委員会の中で、教育委員の皆さん方のそれぞれの識見、御意見などに基づいて運営をしてきた世田谷区の教育行政をより区民に開かれた形で、いわば創造的な議論を積み上げることで、さらに豊富な教育実践へとつなげていただきたいという思いでございます。

本日は多少決め事がありますので 1 つの決まったテーマとはいたしませんけれども、次回以降は、真摯に教育に関する議論のやりとりをしながら、例をとれば、特別支援教育、1 人 1 人に支援が行き届く教育のあり方とはどういうあり方だろうかとか、さまざまなテーマを決めて、場合によっては、教育委員の先生方に発題者になっていただく、あるいは専門の有識者に来ていただいて発表していただき、ディスカッションする、それを区民の皆さんにも傍聴していただくというようなことを考えている次第であります。

また、傍聴していただいたり、そういった問題意識を共有していく中で、さらに深い意見交換も必要だろうということで、教育委員会で開催していただく区民参加型の教育推進会議と時間差を設けて同日開催で、前半部分での問題共有を後半部分でさらに細かく相互で意見のやりとりをすることができるように工夫して進めてまいりたいと思います。

本日は 1 回目ということで、この 1 年を通して議論すべき教育課題やテーマをできるだけ明らかにしたいと思っております。ぜひ教育委員の皆様には忌憚のない御意見をいただき、これからの世田谷の教育の豊富化に向けて御尽力いただきたいと思います。まず、冒頭の挨拶といたします。

それでは、議事に入っていきます。

配付資料の説明を事務局よりお願いいたします。

政策経営部長 本会議の事務局を担います政策経営部の部長の板谷でございます。よろしくお願いいたします。

それでは、座って説明をさせていただきます。

まず、配付資料でございますが、次第の一番下にありますように、資料は3つです。地方教育行政の組織及び運営に関する法律の一部を改正する法律（概要）は、文科省が作成しました法改正のポイントを説明しているリーフレットの写しになります。2つ目が世田谷区総合教育会議運営要領（案）ということで、今回の総合教育会議の運営で、法に定められている以外のものに関して、こういうふうに進めていったらということで案を整理させていただいたものです。最後の世田谷区教育、学術及び文化の振興に関する総合的な施策の大綱（案）は、区の教育の施策大綱、教育ビジョンをもとにして、このようにまとめたらいかがでしょうかということで、案をお手元にお届けしております。また、参考資料として、世田谷区の教育、第2次世田谷区教育ビジョン・第1期行動計画をお届けしてございます。なお、本日の御出席者は、お配りした出席者名簿のとおりでございます。

以上でございます。

保坂区長 それでは、議題の1に入っていきたいと思いますが、会議運営要領について確認をしたいと思います。引き続き事務局より御説明をしてください。

政策経営部長 世田谷区総合教育会議運営要領（案）をごらんいただきたいと思います。本件は、総合教育会議の運営につきまして、地方教育行政の組織及び運営に関する法律の定めほかに、会議運営上必要な事項を定めてございます。

会議の招集につきましては、原則として教育委員会から教育長及び全ての教育委員の出席が必要とされておりますけれども、急を要する場合は教育長の出席のみで開催が可能な旨を規定しております。また、法では努力義務とされている会議録の公表につきましては、公表する旨を明記してございます。本会議の庶務について、政策企画課が務めることもあわせて定めております。傍聴の取り扱いにつきましては、第4条第1項で定めておりますので、御確認をいただきたいと思います。

以上でございます。

保坂区長 ただいま説明がありました会議運営要領ですが、皆様にお諮りしたいと思いますが、何か御意見等はございますでしょうか。

（「なし」の声あり）

保坂区長 異議なしということによろしいですか。

(「異議なし」の声あり)

保坂区長 それでは、会議運営要領については、本案のとおり決定いたしたいと思いません。

続きまして、議題2になります。1番目の資料をごらんいただきたいと思います。このたびの法改正では、各地方公共団体で教育、学術及び文化の振興に関する総合的な施策の大綱を首長が定めるものとなっておりますが、私は、世田谷区教育委員会の指針である第2次世田谷区教育ビジョンを最大限尊重し、ビジョンの教育目標、基本的な考え方、基本方針、施策の柱をもって、世田谷区の大綱にしたいと考えております。この点について、皆さんにお諮りをしたいと思いますが、いかがでしょうか。

委員長、いかがですか。

澁澤委員長 私の捉えている第2次世田谷区教育ビジョンの概略を御説明させていただきますと思っています。

教育目標のところは4つほど丸がついて、どういう子どもを育てたいかということが書いてあります。「ひとの喜びを自分の喜びとし、ひとの悲しみを自分の悲しみとすることができる子ども」、「生きることを深く愛し、理想をもち、自らを高めようとする志をもつ子ども」、「日本の美しい風土によってはぐくまれ伝えられてきた日本の情操や、文化・伝統を大切に継承する子ども」、「深く考え、自分を表現することができ、多様な文化や言語の国際社会で、世界の人々と共に生きることのできる子ども」と書いてございます。これは子どもと書いてありますが、教育は何も子どもだけの教育ではなくて、社会全体が、こういう人たちが多く住む世田谷区でありたいという、理念を書いたものだとして理解しております。その中で、基本的な考えとして、これからの多様性を持った社会とか、それから、学校と家庭と地域ということこそ世田谷区の場合は非常に強く打ち出しております。

1枚めくっていただいて、4ページが基本方針なんですが、「地域とともに子どもを育てる教育の推進」で「地域」と書いてありまして、これは後ほどきょうの1つの議題になるのかなと私は思っています。今のグローバル社会で、今さら地域はないだろうと思われる方もいらっしゃるかと思うんですが、私どもは地域というものを大切に考えて、教育の基本の中に据えつけていきたいと思っています。グローバル社会がつくり出す経済効率や全て貨幣で翻訳できるという価値観ではない、私たちは人間としての肉体を持っておりますので、その肉体の生きる地域というものを大切にして、それと教育をどうかみ合わせてい

くかということを考えていきたいと思っております。

「これからの社会を生き抜く力の育成」というのは、自立という言葉です。「生き抜く」にするのか、「生きる」にするのかということは、実は教育委員会の中でも議論はございました。「生き抜く」というのは、何かほかの人を押しつけて生き抜くんじゃないか、そこまで上げつない表現が必要なのかと議論にもなったのですが、国でもこういう表現をとっておりますので、「生き抜く」というのは、あくまでも人と対して生き抜くではなくて、自分が自分の人生と向き合って自立していけるような人間が育ってほしいという意味で私どもはとっております。

「生涯を通じた学びの充実」は、先ほど申しました、教育というのは何も学校教育、あるいは子どものときの教育だけではなくて、ある意味では人生を通じたものですし、教育で受けたものを社会に返していく循環系ができて初めて教育の成果というものができるわけで、方々でいろんなことを学んで知識がたくさんできて、これで私は満足しましたという自己満足の人がふえてもこれは教育の成果とは言えないわけでございまして、より人生が充実したものになる循環系をつくりたい。

その次に6つの施策の柱が入っております。ここでは、例えば今言った地域という概念や、家庭という概念、世田谷9年教育という子どもをずっと9年間しっかり見守っていきましょうという概念、ある意味では地域の優しさみたいなものです。信頼と誇りは、要するに、今までの知識だけ学ばばいいという子どもではなくて、世田谷で育つ誇りを持ってほしいというもので、これは多分自分たちの自己肯定感につながってくるし、世田谷区民である誇りにつながってくると考えております。安全安心は当たり前のことだと思います。それから、生涯を通じて学び合う地域コミュニティづくりで、やはりここでも地域という言葉が出てまいりました。肉体を持っている私どもがお互いがお互いを支え合いながら、心はグローバルに、だけれども、ちゃんとローカルを見てという体系の中で教育を展開していきたいと考えております。

ここに来るまでに随分いろいろな人たちがこれにかかわり、練ってきた案でもありますので、これをベースに考えていただけるということは大変ありがたいと思っております。

保坂区長 御発言、ありがとうございました。

第2次世田谷区教育ビジョンについて、教育委員会でも議論をいただいて策定していったと。今回の法改正があり、世田谷区であれば区長がその大綱を定めるという形になって

いるんですけれども、教育行政を尊重し、これまでの流れをスムーズに継続しながら、なお新たな視点や議論を付加していくという意味で、ビジョンをそのまま大綱へということをご提案させていただいているわけです。

今、澁澤委員長からお話がありましたけれども、委員の皆さんで議論の際の御発言があれば。

堀教育長 今、澁澤委員長からお話をいただきまして、また、区長が私どもの第2次教育ビジョンについて、大綱として認める、定めるというお話をいただきましたので、大変うれしく思っております。多くの方々に第2次教育ビジョンにかかわっていただきましたので、大綱という形で私どもの教育行政の展開を、今後、力を入れて進めていきたいと思っております。

1つ質問なんですけど、この大綱はどの期間定めるのかということがあるかと思っております。第2次教育ビジョンは10年間という形で進めておまして、今年度で2年目に入ってきております。総合教育会議はことしからやっておりますので、事務方でちょっとお考えかもしれませんが、総合教育会議の開催趣旨が教育行政に首長の考え方を反映させるということになると、区長の任期と重なるのかなと思っておりますが、それについて皆さんと御意見を交わさせていただければと思っております。

保坂区長 法律上は大綱は何年間とか、そういうことは明記されているんですか。

政策経営部長 法律上は具体的な明記はされておられません。

保坂区長 では、その上で御意見があればお願いします。いかがですか。

井上委員 制度改正の趣旨からすれば、首長がこういうふうなことを考えてということをご教育行政の独立性は担保した上でやっていくということですが、首長が変わるようなことがあれば、また変わることがあるかもしれない。ただ、余りくるくる変わってはいけないという議論もありましたので、それについても少し考えていく必要があるかと思っております。

保坂区長 第2次教育ビジョンはいつから10年でしたっけ。

堀教育長 26年度です。

保坂区長 その10年というスパンで、教育ビジョンを下敷きにして大綱を決めたいと思っておりますけれども、こういう議論があったと議事録にも残りますので、趣旨としては、第2次教育ビジョンを受けとめて、そのことを土台にして、きょう決定したいと思っておりますけれども、首長の交代等があったときには、それはまた考えていただくということにしたいと思います。いかがですか。

(「異議なし」の声あり)

保坂区長 それでは、大綱について本案の内容で決定したいと思いますが、いかがでしょうか。

(「異議なし」の声あり)

保坂区長 それでは、決めさせていただきました。

きょうのところの決め事というのは、この2点を行ったわけですが、本日は第1回ということであります。きょうの場合は、冒頭の挨拶にも挙げたように、議論テーマというのを特段決めているわけではありませんが、次回以降はぜひしっかりテーマも決めて、もうちょっと広い会場で、傍聴人もさらに来ていただくような形を考えております。

そこで、せっかくお集まりですので、まず、それぞれの教育委員の皆様方から、教育委員として常に持たれている教育に対する課題意識であるとか、このところの問題意識を伺って、後半に総合教育会議のあり方についても御意見を伺っていきたいと思います。

まず、教育全般について、澁澤委員長から。

澁澤委員長 きょうは傍聴の方もいらっしゃるのですが、もう既に御存じかと思うんですが、教育委員会の構成というのは、教育長を中心とする事務方がずっと日々の業務を続けております。それに対して教育委員というのは、大局的、客観的に教育行政の方向をつくります。私は教育行政と全くかかわらないところで生きてきた人間です。現在は環境NPOの理事長をやっておりますし、その前はJICA 国際協力機構で発展途上国への技術援助をやっていた人間でございます。横にいらっしゃる永井さんはPTAで活躍されてこられた、ある意味では、子どもたちの保護者の代表として御発言をされておりますし、井上さんは、教育というのを学術的にずっと見られている。データですとか物の考え方ですとか思想の流れということを非常に客観的に分析される知見をお持ちの、教育学のプロでいらっしゃいます。それから、原さんは、逆に、かつて校長先生という形で、教育の現場を一番御存じの方ということで、それぞれ発言されるということをまず最初に御紹介させていただいて、いきなり私が、教育とは全然関係のない人間が教育を取り囲む全体の環境の中からのお話をさせていただこうかと思っています。私という人間がどんな人間で、どんなことを考えているかということをおわかりいただければいいのかなという思いで、最初に話題提起でしゃべらせていただきます。

きょうも大きい地震がありましたけれども、3・11の震災がございました。その中から、私どもが環境NPOという形で、いろんなところで復興のお手伝いをさせていただいてお

りますが、そこでつくづくわかったことは、私どもの地域のベースというのは、私どもの食べる食料や水、私どもが日々こうやって使っておりますエネルギー、私どもそれぞれが相互で助け合い、あるいは医療機関が助け合う福祉や医療という分野、そして教育。多分この4つが私どもが生きるということの根幹の部分だと思っております。

今回の震災ではっきりしたことは、被災地で避難民の方々とお話して、この4つの部分はみんな行政がやってくれるものだろう、あるいは国がやってくれるものだろうと思っていて、住民はこの4つに関してはノータッチだったということを実感しました。その意味では、被災された方も、都市に住んでいて被災していない人間も、この部分に関しては全くノーアイデアといえますか、自分たち住民の主体性をはっきりと持っていなかったということがわかったという感じが私はしております。

その中で、教育というものを私ども住民の手にどうやって取り戻すかということを実際に考えなきゃいけない。それはなぜかと申しますと、私が今やっていますNPOで、聞き書き甲子園という、毎年100人ずつ高校生を全国から集めて、森とか海とか川とか自然の中で生きてきたお年寄りたちの話を聞き書きによって残していく活動をちょうど14年続けております。4月から始まりますが、もう1300人のお年寄りたちの記録と、それを記録した1300人の高校生たちが巣立ってまいりました。

その高校生たちと毎年ずっと話をしておりますと、何に対して一生懸命になっていいかが全くわからないという話を非常に多くの高校生たちがいたします。自分の父親、母親の代、あるいは自分のじいちゃん、ばあちゃんの代は、いい会社へ入って、安心、安定した生活をするために、学校というのは勉強して一生懸命頑張る場だった。だから、おやじも、一生懸命勉強しろ、勉強しろ、おまえ、勉強しないといい大学へ入れない、入れないと、いい会社へ入れないぞと言うんだけど、それは本当なのか。例えば今の高校生で、自分たちの代が年金を満額もらえるなんて思っている子は誰もいません。年金制度は破壊しているんでしょと尋ねてきます。この間、堺屋太一さんと竹中平蔵さんが日本の社会保障制度はあと25年もたないと言っていた、あの人たちは日本をつくってきた人たちだよ。社会保障制度も年金制度も、システムが非常に危機に立っている。なおかつ、うちのおやじを見ていると、会社でリストラに遭うとか、会社が倒産するという話が幾らでもある。もっと言うと、日本の超優良企業で、日本の経済を引っ張っているトヨタ自動車ですら、自分たちが悪い車をつくったから業績が下がるのではなくて、為替が、円が高くなると赤字になり、円が安くなると黒字になる。つまり、一生懸命働いても、それに見合わな

い。ある意味では、不可抗力によって自分の人生が決められてしまうということに対しての不安。つまり、何に対して一生懸命勉強し、何に対して一生懸命働いたらいいのかということを見失っている高校生が大変多いということに気づいております。

なおかつ、この50年間で、かつてと全く違った状態に置かれているのが金融マーケットです。実は私のひいじいさんの渋沢栄一という人間が資本主義というものをこの国に持ち込みました。資本主義というのは、その当時、士農工商という身分制度を壊すのに、資本主義経済ということでやれば全員平等じゃないか、それから富国強兵ができるじゃないかという形で持ち込んだ。つまり、お金に国が信用を与えたということです。それによって、お金を国が集めて、それを有効に使うことによって国づくりができるぞと言ってやってきました。その資本主義が世界中で繁栄をして、東西ベルリンの壁が壊れて、共産主義が敗北して、資本主義が勝利だとみんなが思った瞬間にパソコンというものができてきて、お金がお金を生むという仕組みができてしまいました。ウォール街経済とかカジノ経済と言われているものですが、それによって、金融マーケットが実体経済の70倍から100倍の大きさに膨れ上がりました。つまり、お金が世界を支配するという状況は、わずかこの20年ぐらいにつくられた状況です。

その中で、先ほど私が説明した自立だとか誇りだとか自己肯定感ということは、お金でははかれないものなんです。全部人との関係性だとか自然との関係性だとか、あるいは自分というものの価値観という話になってきます。お金ではかれないものをしっかりと教育の現場で次の世代に伝えていかないと、お金だけを追っかける人間を育ててしまう。ある意味では、資本主義というのは既に非常な危機を迎えているんだと思います。まさに今アベノミクスで、なかなか景気がよくなるのも、金融マーケットにお金が全部行ってしまって、金融マーケットだけが大きくなってしまって実体経済に行かないという現象でございまして、この時代に、小学生や中学生、世田谷の子たちに、ここで一生懸命勉強して、学校が楽しくて、自分の人生に誇りを持てるんだという、お金ではかれない価値をしっかりと与えていかないと、世田谷の教育というものは成果をあげられないのだろうなと、あるいは世田谷区民であることの誇りを持てる人間が育てられないのだろうなということ私は何となく思って、教育委員会で発言させていただいているということでございます。

保坂区長 澁澤委員長、ありがとうございました。短い時間の中で、グローバル化する現状のこの20年の大きな変化というのをお話しいただきました。まさに子どもたちが知り

たいのはそういうことなんでしょうと思います。何のために生まれて、誰のために生きるのか、そして目標は何だということところが、少し前の世代だと豊かな生活だったり、そのもつと前だと富国強兵だったりだと思います。そのところが、未来が非常に不透明である。いろいろな価値観が頼れるような、かたいものではなくって、少しぼろぼろ崩れていくような感覚もある中で、澁澤委員長は限界集落の現場に年間しょっちゅう行っていらっしやいまして、人間の住まい、共同体という中で、森の中で暮らしてきた皆さんの視点から、教育の問題や子どもの学びのことについても実践をされていると聞いておりますので、またよろしく願いいたします。

では、永井委員はいかがでしょう。自己紹介も兼ねながらお願いします。

永井委員 教育委員の永井と申します。先ほど澁澤委員長から御紹介がありましたように、私は保護者という立場で委員を務めております。

私は、世田谷区立小学校PTA連合協議会、ちょっと長いので世小Pと縮めさせていただきますけれども、その役員をさせていただいて、活動してまいりました。先日も世小P総会が開かれて、さまざまな事業報告がされたのを聞いて、本当に忙しい中、保護者の皆様が子どもたちのために毎日PTA活動をされているんだなと感謝したところでございます。

世小Pというのは60何年もたっています。恐らく活動の中で、いろいろな事業はちょっとずつ変わってきているとは思いますが、子どものためという保護者の思いというところでは、昔も今も全く変わらない活動をしているんだなと思っております。

その中で、専業主婦のお母さんたちよりも、もしかしたら今は仕事を持って子育てをされている家庭のほうが多くなってきているのではないかと思います。家庭教育ということでは、複雑な諸事情を抱えていたり、さまざまな家庭がある中で、PTAに携わる保護者は、自分の子どもが通う学校の教育の環境がどういうふうになれば子どもが健やかに育ってくれるのかということを考えながら活動しているのではないかと思います。

私も息子が高校3年生になりましたけれども、小学校のときは、毎日学校に安全に行き、何事もなくただいまと帰ってこられる環境づくりに取り組んでまいりました。その中で、学校における教育の環境ということで、世田谷区に要望書としてまとめて提出させていただいております。安全面ということ言えば、学校に警備員を配置してほしいと継続して要望してまいりました。その結果、世田谷区も、子どもたちは本当に地域の宝でありますので、ぜひ警備員を配置しようということで、今、小学校も中学校も配置させていただいて、

保護者としては本当にありがたい環境をいただいたと思っております。

私はPTAの会長をして、そこから委員になったと先ほどお話ししましたがけれども、私は一委員ということではなくて、保護者の代表として委員を担っているんだと日ごろ思って、この委員会活動をさせていただいております。先ほど区長から教育の議論を次回からはテーマを決めてやろうという提案をしていただいて、本当に助かるなと私が思ったのは、私は教育の専門家ではありませんので、引き出しをあけても、なかなかそういった議論はできませんけれども、さまざまな保護者の声を聞いて、そして代表としてここに来て話をさせていただくということが私の役割ではないかといつも考えて、学校の教育、あるいは家庭教育というところに保護者の視点を合わせて考えていきたいと思っております。

以上です。

保坂区長 永井委員、ありがとうございました。世田谷区のPTAの活動から教育委員として参加をいただいているということでございます。またいろいろとこれからも意見を出していただければと思います。

では続きまして、お隣の井上委員から、自己紹介も兼ねて、大変幅広い研究活動と、そしてまた、世田谷区における教育とのかかわりも少しお話をいただいた上で、問題意識をお願いいたします。

井上委員 教育委員の井上でございます。私が教育委員に就任したのは今年の11月末ですので、一番キャリアが短い教育委員であります。

私は、世田谷区にある大学の教職課程という教員を養成する仕事をしております。今の大学に10年ほど前に移ったんですけれども、そのころから世田谷区の学校とさまざまな形での御縁ができて、学校に行く機会もふえ、また、その中から、世田谷区教育委員会のさまざまな仕事、例えば学校外部評価委員というのがありましたし、地域運営学校の委員もありました。それから、今は教育委員ですが、教育委員会の施策全体を評価するという仕事をさせていただいたこともあります。そんなことをしながら、自分自身の研究では理念的に、あるいはデータを見ながら考えるということが、現場で実際に子どもたちがどういうことをしているのか、先生方がどんな活動をしているのかというのをいろいろ見る機会がかなりふえておりまして、そんなことを通じて勉強させていただいているということがあります。

いろいろ関心を持っていることはありますけれども、一番大きいのは何かと、今、濫澤委員長や永井委員の話を聞きながら考えていたのですが、時代が大きく変わっていく、

人々の価値観や意識が変わっていく中で、公立学校というのはどういうものであるべきなのかではないかと。学校に限らず、教育というのはどういう意味を持つべきものなのかということを私は考え続けてきましたが、特に世田谷にかかわりを持ちましたので、世田谷では、学校というもの、教育というものは今どういう状況にあって、これからどういう方向に向かっていくのがいいのかというのを考えていかなければならないと思っております。

といいますのも、この10年ぐらい、世田谷のいろんな学校現場にかかわらせていただいているのは、世田谷区というのはかなり意欲的な試みを全国に先駆けてやっていることです。それを今までは外から見ていたわけですが、先ほど澁澤委員長や堀教育長から紹介がありました3つの基本方針にしても、例えば「地域とともに子どもを育てる教育の推進」というのは、平成9年から学校協議会というのを始めて、各学校に地域の方、あるいはいろんな関係機関の方たちが集まって協議する場をつくりましたし、そのきっかけになった1つが、阪神・淡路大震災であった。学校の安心安全といったものもかなり早い段階から意識されていたということも、ああ、なるほどな、そういうことがあったのかと思っております。

これからの社会を生き抜く力ということでも、世田谷9年教育であるとか、言葉を大事にする教育である教科「日本語」、これは特区を利用した制度ですが。それから、姉妹都市で、オーストリア、オーストラリアの2つの都市との交流をしていって、実際に子どもたちや先生が行ったり来たりしているんですかね、そのような機会をつくったりしている。

また、基本方針3にありますけれども、先ほど澁澤委員長から話がありましたけれども、教育は学校だけじゃないということで、生涯学習、あるいは少し前でいうところの社会教育の部分でも、かなりいろんな意欲的なことをしている。最近では、図書館のビジョンを新しく策定したり、行動計画によって図書館のあり方を変えていく。単に本があるということではなくて、町の中に知と文化のネットワークといったものをつくって情報発信していたり、人々が生活の中で文化や教育にかかわる場をつくっていかうとされている。教育委員会の立場からすると「している」ということですが、そういう意欲的なことをかなりやっている。ただ、いろんなことをやっているのでも、それぞれの関係が少し見えなくなってきた部分もあるかもしれないと思いながら、どんなふうにより世田谷らしい教育、文化のあり方にしていけばいいのかということに関心を持っております。

今、世田谷らしいと申し上げましたが、世田谷らしいというのは一体何なんだろう。こ

れは保坂区長ともディスカッションしながら考えていかなきゃいけないと思うんですけども、同じ東京でも、世田谷以外にたくさんの区があるわけで、そういったところと比べて、世田谷らしさというのは一体どこにあるんだ。私たちは教育にかかわるわけですから、世田谷の教育というのはほかとどう違うんだ、世田谷の子どもたち、若者たち、あるいは地域社会の人々や保護者や一般の区民の方たちは、ほかの区とどう違うのか。どこかの文書に、世田谷で暮らしてよかったと思えるようなところを目指すを書いてあったと思いますが、それは一体どこにあるのか。もちろんほかのいるんなところと比べますと、世田谷は文化も交通の便もいいですし、恐らく経済的にもかなり豊かである。しかし、澁澤委員長が言われたように、そのことだけが人々の暮らしをよいものにしていくわけではないですから、世田谷らしさというのをどう捉えていくのかということを考えていかなければいけないと思っております。

同時に、この仕事をして、学校の先生方や教育委員会の人とか、いろんな人にかかわっていく中で、とかく学校とか先生とか教育委員会というのは悪者になることが多いんですけども、多くの方たちは一生懸命されている。その一生懸命されていることももっと発信して行って、その一生懸命している方向性をほかの区民の方たちと共有できるような機会、きっと保坂区長はそんなことを考えながら、総合教育会議といったものを運営していかれようとしているんだろうと思うんですけども、単に要求したり、単にあれはだめだと批判するんじゃなくて、お互いによりよい町、教育を考えていく機会をつくっていかなくちゃいけないと思っています。

同じことは、教育委員会だけでなく、教育や子どもにかかわる者としては、ちょっと専門的な言い方で区長部局と言うんでしょうか、そのの部分でも、例えば学校とは少し違う角度から子どもたちの援助をしていたり、若者のサポートをしていたりということもあるんです。ただ、それがどうしても縦割りと言われる中で、教育の問題、学校の問題と違うようなこと、保育なんかもそうだと思うんですけども、そういうことが幾つかあるような気がしていますので、そういった問題もこういう機会を通じて、これは教育委員会のものだというセクショナリズムだけではなくて、一緒に考えて行って、世田谷らしさというのはどこにあるのか、世田谷の教育をどんなふう考えていったらいいのかというのを皆さんとディスカッションしながら考えていけたらと思っております。

保坂区長 ありがとうございます。世田谷らしいと一言で言えますけれども、これを定義していくと、教育や学校についてはどうなのかということにはまさに大きなテーマだと

思います。

それでは、原委員に御発言いただきたいと思います。

原委員 原でございます。先ほど濫澤委員長から御紹介いただきましたように、私はもともと中学校の理科の教員として、35年間、毎日中学生と一緒に生活をしてまいりました。退職後、現在は、井上先生と同じようなところなんですが、もともと研究者ではございませんけれども、大学で教員を目指す学生に教職課程を教えている者でございます。ですから、現在は大学生が相手の生活をしております。

振り返って、私は教育という仕事を選んでよかったな、幸せだったなと思っています。それはどうしてなんだろうかと思うんですけれども、実は5年間だけ直接的に教育ではない仕事も経験いたしましたので、そういう仕事に比べて、私が人生をずっと歩んできた教育はやっぱり素晴らしいなと思っています。

では、何がかという、子どもが学んで成長することを確認できるということがとても幸せなことであったと思います。この仕事は、人はもともと善であるという、性善説とよく言われるんですけれども、人の本質はいいものであるということ信じられないとできない仕事だと思っているわけです。確かに、何十年という長い教員人生の中で、想定外の、つまり裏切られるような思いはなかったのかという、そんなことはもちろんないんですけれども、それでもなお私は人を信じることを続けられた、そういう仕事であったと思います。

井上委員が世田谷らしさとは何だとおっしゃるんですが、私は世田谷の中学校に26年間勤務して、世田谷に住んでも長いので、世田谷の学校、世田谷の教育というのは、本当に日常的に肌身に感じながら過ごしてきたんですけれども、世田谷の学校における世田谷らしさとは何かといったら、信頼なんじゃないかと思っています。これは生徒と教員、あるいは学校と保護者、地域との間の信頼関係、何物にも脅かされない確かな信頼というのがあるなと思っているところなんです。

この信頼関係を崩すことが私はとても怖いなと思います。正直言って、教員がここで勤務してよかった、そこで働きたいと思うような学校でなければ、そこで学ぶ子どもたちが学んでよかったと思える学校であるはずがないと思うんです。かつて世田谷は、東京都の教員の異動制度の変更なんかもあったんですけれども、世田谷に行きたい、世田谷の学校にかわりたいという先生たちが多い地区でありました。では、今はどうなのかという、その状況に少し変化があるかなという思いを私は不安として少し持っています。ですので、

先ほどお話ししたように、信頼される学校であるためには、まず何よりも信頼できる、そこで働きたいと思う教員がたくさん集まってくれる世田谷にしていくことがとても大事ななと思います。

今、大学生を見ていても思うんですけれども、子どもたちの中で一番問題かなと私が思っているのは、自己有用感という言葉も出てきたんですが、子どもたち自身が自信が持てないというのはもちろんそうなんですけれども、意欲がない、意欲が湧かないということが見られる。全ての子どもたちがそうだとは思いません。いつでもそうだとも思わないんです。でも、ここで意欲的になってもらいたいなと思うときに意欲を持ってもらえないという場面に出会うことがあります。これがとても気がかりなところなんです。

どうしてそうなるかしらと思うんですけれども、1つには、成果を出さなければならぬというプレッシャーがあるのかしらと私は考えています。教育というのは、1年頑張ったから、目覚ましい成果が1年後に目に見えて数値であらわれるというものばかりではないんです。1年頑張ったことが10年先、20年先に初めて実を結んで形になるというものもたくさんあります。ですから、短期間で目に見える成果を求めるということは、子どもたちにとって意欲をそぐことになりかねないことであろうと私は今考えているところです。

子どもたちの問題、そして、その子どもたちと本当に毎日長い時間接する教職員の問題と、私の中では取り組まなければいけないことがたくさんあると思って、この仕事をしているところでございます。

以上です。

保坂区長 原委員、ありがとうございました。

それでは、堀教育長には、教育行政を統括している立場で、現にどういうところに苦労されているかとか、あるいは世田谷の教育のリアルタイムの現状の課題も含めてお話しただければと思います。

堀教育長 このポストにつきまして3年目に入りまして、今の 原委員の話ではないんですが、教師の仕事の奥深さ、すばらしさを大変痛感しています。皆さん、管理職研修で一生懸命勉強しておりまして、講師として招かれることもあるんですが、そこでの最近の私のミッションは、教師のすばらしさをPRする。例えば具体的には、お給料を上げてもらうとか、そういうことも踏まえて頑張りますという話をしております。

今、区長から、苦労していること、リアルタイムでということも踏まえてお話がありました。世田谷は何といっても数が多いですので、非常にあれもやりたい、これもやりた

い 皆さんには第2次世田谷区教育ビジョン・第1期行動計画のパンフレットが行っていると思いますが、平成17年度から平成25年度の第1次は済みました。平成26年度から第2次教育ビジョンが動いていますが、私どもとしては、第1次で立ち上げました世田谷9年教育の定着と質の向上というのをまず進めなくてはいけないと思っております。それを前提に、第2次では、第1期行動計画という形で、4年区切りでいろんな施策を固めていきたいという考え方で取り組んでまいりましたので、この進捗が大変気になっております。今、4人の方々にお話しいただきましたが、教育委員会は毎月2回設けさせていただいておまして、教育委員会の始まる前、始まった後も、きょうのような意見交換を必ずさせていただきまして、教育ビジョンの進捗に生かしているのが現状です。

苦勞しているのは、先ほど申し上げました予算の絡みですが、例えば今年度は区長の御配慮によりまして、ICTに11億円の予算をつけていただきました。全校の普通教室、特別支援教室で、先生方がタブレット等を使って授業力を上げる、子どもたちが興味のある授業を展開できるという環境をまずつくっていただきましたので、こういうものを1つ1つ積み上げていきたいと思っております。

それと、具体策で見えないところがありまして、非常に苦慮しているのは、今回の第2次教育ビジョンは、学校教育だけではなく、生涯学習、家庭教育にも踏み込んでいきたいという考え方を持って取り組んでまいりました。ただ、家庭教育は大変難しく、それぞれのプライベートの中には入り込みにくい。ただし、親の学びを何らかの形で実現できないかということも踏まえまして、今現在、新教育センターということを検討しておりますが、その中に幼児教育という形で1つカテゴリーをつくらせていただきまして、検討しております。家庭教育学級という形でも取り組みをしておりますが、学校と家庭、PTAだけでは奥行きがないということも踏まえまして、幼児教育センター、幼稚園の認定こども園化の見直しも踏まえまして、そういう分野で家庭教育の推進ができないかということを考えております。

あと、教師のすばらしさということを言うためには、教員は大変多忙です。二、三日前にも、副校長、教頭のなり手がいないということが某新聞のトップに載りましたが、あれは現場を見ていると大変痛感する事柄です。したがって、例えば給食費の徴収等は、今は各学校で行っているんですけども、それを公会計化できないか。つまり、教育委員会で徴収することにより、教員の雑務と言うと変ですけども、事務から解放できないかということもあわせてやっております。人事関係とか財務関係とか給食費とかで、教師が子

どもたちに十分かわる時間ができていない状況が今ありますので、そういうものを第1期行動計画の中で検討していきたいと思っております。

「みんなの学校」という映画がありまして、区長からぜひ見ておいたほうがいいよというお話をいただきました。大阪の公立小学校のドキュメントなんです。1年間にわたった学校の物語なんです。大変校長のマネジメントがよくて、発達障害等々、障害のある子どもたちも、特別支援も踏まえて、普通教室で本当にみんなが個性を認め合って勉強しているという学校の映画ですが、機会あるごとにお話をさせていただきましたところ、ことしの7月の川場で毎年やっております新人教員の研修でそれを放映し、彼らとディスカッションしようと思っております。もう1つ、校長たちが大変関心を示しまして、自主上映会をやるので、7月前後、8月くらいに映画を見ていただいて、ドキュメントですから、うそはないので、校長のリーダーシップによって学校が変わる、教師が変わる、子どもたちが変わる、そういうものを見ていただいて、日ごろの学校運営に生かしていただきたいということも今やっております。

事務方の責任者ですので、いっぱいやらなくちゃいけないことがあるものですから、いっぱい話したいんですが、このくらいでとどめさせていただきます。

保坂区長 ありがとうございます。

私自身も教育委員の皆さんといろいろお話しはしていたつもりですが、改めてきょう初めてお話を聞いた部分もありまして、こういう機会も大事だなと思いました。

資料を配っていただけますか。私から少しだけお話をさせていただいて、それから、総合教育会議のあり方についてのお話をまた一通り受けていきたいと思えます。

先ほどの澁澤先生のお話と非常に深い関連があるんですが、世田谷区の特徴は、全国的には少子化社会、あるいは人口減少、消滅可能性がある都市ということで幾つか挙がる中で、それとは全く逆に、子どもの数が激しくふえていると言ってもいいだろうと思います。5歳までの子どもが毎年1000人ずつふえていくという中で、今、小学校の中学年よりも乳幼児のほうが相当数が多いという状態になっていて、したがって、待機児童問題等で全国的にも非常に状況が厳しいという自治体になっています。

そういった中で、子どもたち、そして子育てを応援するという取り組みを、今は学校を中心に総合教育会議で話をしていますけれども、学校の時間が終わると、放課後学童、新BOPがあります。あるいはその学校を出て、児童館に行く子どもたちもいます。地域の図書館に行ったりする子もいるでしょう。また、少ないけれども、冒険遊び場という場

所もあります。いろんな子どもたちの居場所があるわけで、アンケートなどを見ておりますと、世田谷区で子育てをしたい方がやはり一定程度いらっしゃって、お引っ越しをされてからお子さんをもうけられるということがどうも多いように感じています。そういった中で、いいことばかりではなくて、幼稚園は余り新設されていないので、仮にこども園をつくろうとしても、どうもこれはうるさいのではないかという、いわゆる近隣問題として、近隣の皆さんの理解がなかなか難しい場所もございます。

そういった中で、区の一般会計予算は2700億円なんですが、実はどんどん教育予算はふえておまして、子ども・子育て関係と教育を合体すると約700億円です。これは10年前の2倍になっています。そういう意味では、区の支出の4分の1は子ども・子育て、教育関連であると言っていい事態なんですが、そこまで力を入れているといえば力を入れているんですが、個々具体的に、保育園は足りているのかとか、学校はちゃんと修繕されているのかということを見ると、なかなかまだ力が及んでいないという状態であります。

しかし、持続可能性というありきたりな言葉ではなくて、日本全体が子どもがどんどん減少して、子どもが成長して若者になるわけですから、そのところがずっと細っていくという傾向に対して、そうでない傾向が出ているというのはとても大事にしたいと思っております。これは教育委員会と相談をしながらですが、今、傍聴の方と教育委員の方のお手元にお配りした子ども・子育て応援都市宣言というのを3月3日に出了ました。短いものなので読んでみたいと思います。「子ども・子育て応援都市宣言 子どもは、ひとりの人間としてかけがえのない存在です。うれしいときには笑い、悲しいときには涙を流します。感情を素直にあらわすのは、子どもの成長のあかしです。子どもは、思いっきり遊び、失敗しながら学び、育ちます。子どもには、自分らしく、尊重されて育つ権利があります。子どもは、地域の宝です。大人は、子どもをしっかりと見守り、励まし、支えます。地域は、子育て家庭が楽しく子育てできるように応援します。子どもは、成長に応じて社会に参加し、自分のできることと役割、みんなで支えあう大切さを学んでいきます。子どもは、未来の希望です。今をきらめく宝です。大人は、子どもにとっていちばんよいことを選び、のびのびと安心して育つ環境をつくります。世田谷区は、区民と力をあわせて、子どもと子育てにあたたかい地域社会を築きます。ここに、『子ども・子育て応援都市』を宣言します。平成27年3月3日 世田谷区」という内容のものなんですが、これは各学校を初め、子どもの関連の場所に掲示していただいたり、まだ出したばかりですので、区民に十分浸透していないと思いますけれども、このような宣言を出しながら、区の土台として、

子ども・子育て教育をしっかりとバックアップしていく。そこは本当に基礎中の基礎だという姿勢を明らかにしたつもりであります。

以上のことを報告した上で、教育長からもお話がありました、学校の先生が多忙である、あるいはICT、タブレット端末もつけているんですけども、こういったことをいろいろ試行錯誤しながら教材研究をやったり仕込んだりする時間が十分ないという声も上がってきています。

先般、ちょうど1年前でしたけれども、小学校の校長先生お2人と中学校の校長先生お2人、計4人と教育長と私と事務局でオランダの教育視察ということで1週間ほど行ってまいりました。こういった中で私が非常に感心をしたのは、先ほどちょっと触れた特別支援教育において、かなりきめ細かく、1人1人がどこで伸びていて、どこが理解できなくて、つまづいているのかということデータをデータ化して、1人1人に寄り添った形でのサポートの手を入れているんです。そういう仕組みでやっているところを見て、これはなかなか大変なことに取り組まれているなど、強い印象を持って帰ってきました。世田谷区でも、そういったところに近づけていく。障害者差別解消法という法律が来年から施行されるんですけども、障害者の権利宣言というものも、日本は仲間になった、批准をしたというところで、そこは大変強い印象を持ちました。

もう1つは、学校がかなり自由に設立される独特の風土、歴史がオランダにはあったそうなんですけど、こういった中で、教育の自由というのは、基本的にはどの学校でもどんな授業スタイルをとっても構わないけれども、全国をコントロールする仕組みが一応あって、そのコントロールする仕組みの中で、学力的に伸びないと、やはり生徒が集まってこない。生徒が集まってこないと学校の経営が成り立たない。そこで市場で淘汰されていくということではなくて、教育支援センターというのがオランダの各地域にありまして、そちらを訪問したわけなんですけど、その教育支援センターの中身がすばらしかったです。教育学者やベテランの先生が何人がいらっやって、世界中から集めたデジタルの教材もありましたし、ゲームのようなものもありました。教材が非常に豊富に整えられていた。ジャンルごとにきれいに分けられていて、そして、個別の学校で授業がうまくいっていない、このところで問題が生じているということがあると、そこに相談に来る、あるいは教育研修がそこであって、今学校で抱えている問題に対して、専門家たちが入りながら、例えばこの教材を使ってやってみたらどうだろうかというようなアドバイスができるという姿を見てまいりました。今現在、区では、新教育センターをつくっていかうと。現在、弦巻にあ

ります教育センターは図書館も併設されていますけれども、それぞれが狭いということもあって、これはただお引っ越しをするだけではなくて、日本でまだないような、現場の教員や学校そのものをサポートできるような教育センターがとても必要だろうと。それに向けたハードの手前のソフトの議論をぜひしたい。

この2つの点をオランダ視察で感じてきたわけなんですけれども、以上のことを申し上げて、残り時間20分ほどですけれども、総合教育会議の持ち方や今後議論していきたいテーマについてお話をいただきたいと思います。

ちょっと順番を変えて、井上委員からお願いします。

井上委員 今、区長が言われた新しい構想での教育センターというのは、私自身もかなり期待しています。それ以外に教育支援チームといったものも動き出している。これは国のサイドでも提言されていますけれども、そういったものが実際にことしから動き出している。世田谷は、そういう意味で、かなり先進的な試みをしていく区 自分も当事者の一人なんですけど、そういうところのよさが前々からあったんじゃないか。

総合教育会議の議論の中では、例えば世界的な国の動向などを押さえながらも、この世田谷でそれがどういうふうな活動ができるのか、意味を持っているのかということも同時に考えていく必要があるかと思っています。やはり隣の区とかほかの都市ではなくて、この世田谷だからこういう問題があるのだということを常に、グローバルな視点などを持ちながらも世田谷という場所でやることを考えていくということは次の議論をしていく上でも大事だろうなと思っています。

そのほかにもたくさんあると思うんですが、区長が言われなかったことで言うと、世田谷はもちろん文化的、経済的にも豊かなところがありまして、私学もたくさんある。小学校から中学校に行くときに、区立の小学校を卒業した子どもたちの3分の1ぐらいが区立の中学校を選ばずに私学を選んで進学する。私自身も私学の教員ではありますけれども、もちろんいろんな状況の中から、いろんな形で子どものことを考えて保護者が選ばれるんでしょうけれども、9年教育、あるいは世田谷の公立の学校ということを見ると、区立中学校のよさというものは一体どこにあるんだろう。それは地域の中の学校ということも含めて、あるいは学校以外の、学校に入る前のお子さんや学校を卒業した後の若者の問題を含めて、区立のというか公立の問題、その魅力というものをどんなふう考えていくのかということも、世田谷の問題との関係において考えてみたいと思っています。

さらに、家庭の問題で言いますと、これは後で永井委員に伺ったほうがいいのかもしれな

いですがけれども、世田谷のお母さんたち、保護者たちは世の中一般の保護者とは違うかもしれない。ある意味、文化的な水準が高いでしょうし、これは堀教育長に伺ったのかもしれませんがけれども、いわゆるM字曲線がM字にならずに、子育てが済んで、パートの仕事などはしなくて済むような経済状況であれば、子どもの問題や文化的な問題にかかわっていくということがあると、世の中一般の女性の問題、あるいは家庭の状況とは違う、世田谷らしい家庭教育の問題などがあるんじゃないかと思っておりますので、もしそういう話題に及ぶようであれば、そういったことも考えていく必要があるかなと思いました。

保坂区長 ありがとうございます。

では、永井委員、お願いいたします。

永井委員 井上委員から世田谷の保護者の意識が高いのではないかというお話もありましたけれども、いろんな体験、経験をされている保護者の中には、そういった方もたくさんいらっしゃいます。専門性を持った方もいらっしゃいますし、また、海外で暮らして、日本に戻られているという方もいらっしゃいますし、学校の支援ということで、さまざまな教科に支援員として入っている保護者も多くいらっしゃいます。例えば海外で暮らしていた経験を生かして英語支援員になってみたり、自分の専門性を生かして理科支援員になったり、家庭科や図工とか絵画でも学校にボランティアとしてかかわっている保護者もたくさん聞かれます。そういった意味では、教育ということに関して意識の高い保護者が世田谷の中には恐らくいるんじゃないかと思えます。

私は、保護者であると同時に地域の住民といいますが、地域がどのように学校や家庭と連携してかかわっていくかという地域の教育ということも、もしかしたらこれからさまざまな意味で必要になってくるのではないかと考えています。新教育センターの中で地域が子どもや生涯学習というところで学び、そして社会にかかわっていくというような学習をする機会も必要な時代になっていくのではないかと考えています。

保坂区長 原委員、お願いします。

原委員 この総合教育会議の持ち方ということだと思っておりますけれども、区長がおっしゃったように、何かテーマを事前に示していただいて、それぞれ考えてきたり、場合によっては調べてきたりする中で、そのテーマについて考えをいろいろぶつけ合うという場にしていかれるといいなと思っております。

当然、私たちが今取り組まなければならない課題はたくさんあるんですけれども、その中で、今それぞれ自己紹介した経験とか考えを持っている委員が、区長も含めて、お互い

にやりとりする中で、きちんと消化できる、そして、教育長によってそれが具体的な政策に結びついていく形になるといいなと思っているところです。

差し当たって何がと言われても、幾つもあるんですけども、私は、先ほどからこだわっている学習意欲の確立ということもとても大きな問題だと思っています。これは子どもの問題だけではなくて、大人も含めた意欲、大学生でも意欲が低いなど感じる場面もありますので、そういうことも1つかなと思いますし、特別支援教育も本当に課題の多いところかと思えますし、たくさんあるとは思っておりますが、いずれにしても、次回のテーマはこれということをおあらかじめ決めて話を進めていく方法はとてもいいかなと思います。

保坂区長 ありがとうございます。

それでは、澁澤委員長。

澁澤委員長 もういろんなテーマがほとんど出たのかなと。

あともう1つ、今のお話の中で出なかったのは、英語教育と、それから子どもは教科「日本語」というのをやっています。英語をしゃべれるようになるとか、日本語の古文を知ることなども重要なんですが、一番考えなければいけないことは、日本語で物を考えるということをちゃんと教育できているのか、というあたりをもう1回、足元を見直さなければいけないと思っています。

それから、やはり地域や家庭というキーワードが出てきます。地域、家庭というキーワードの向こう側にあるのは、働き方が変わってくるということなのだと思います。本年度はフィンランドの視察を予定されています。フィンランドでは、夫婦で共稼ぎをして、それぞれが仕事を持っていて、それで地域の中で、その中でできる人たちが子どものサポートをしながら、国全体で子どもを育てるといような子育ての仕方をしていて、その場所を例えば図書館に求めたりとか、いろんなところをセットしている。

それは裏返せば、世田谷区らしい働き方というのは一体どういうことなのか、を問うことになります。先ほど保坂区長からお話がありましたが、今、子どもが多くなっている。子どもがどう社会的な接点を持つのかということも重要ですが、もう1つは、団塊の世代が定年を迎えて、社会との接点をなくしました。子育ても地域社会との付き合いもみんな奥さんに任せていたという人たちが圧倒的に多い。その団塊の世代を、今まで生きてきて、いろいろなノウハウを持っていらっしゃる方々を世田谷区の社会システムの中にどうつなぎ合わせていけるか。それは専業主婦もそうなのかもしれません。つまり、そういう人たちに教育の現場である程度役割を担っていただくことによって、そういう方々に社会で必

要とされているんだという自己肯定感も持っていただき、子どもたちの教育にもそれがつながって、それが世代をつなげていく、という図式が実現できないか。つまり、この教育会議は、教育という視点を通して、未来社会がどうあるべきなのかということから、そこにどう近づくのかという議論を進めていくことを私はやっていただきたい。

例えば特別支援学級の問題も、今の特別支援学級の教育に何の問題があるのか、それをどう解決するのか。それはやはり現場が一番議論をしなきゃいけないことですし、ちょうど特別支援学級の今後の進め方という基本方針が教育委員会でもまとまったところですし、「せたホッと」からの要望書も出てまいります。私どもが施策をやるときに、どうしてもシステムを考えてしまうのです。システムを定着させようとするんですが、それをやるのは人間ですので、それをやる現場の人たちを育てないと、システムは絶対に動かない。そうすると、今、教育の現場は、特別支援教育の中でどういう問題を抱えていて、今どっちへ向こうとしているのか、彼らをどう育てるか、そのためにどういうことができるのかということをごここで真剣に考えていく。これは働き方もそうだと思いますが、今ある人々をどう育てながら、未来のどの社会にどう結びつけていくのかというあたりのお話があるいろいろな切り口からできると大変ありがたいと思っております。

保坂区長 ありがとうございます。

それでは、教育長。

堀教育長 いろんな御意見をいただいておりますので、限られた回数ですので、セレクトしなくてはいけないと思っておりますが、手法の一つとして、私どもは第2次教育ビジョンの中では、教育フォーラムというのを改めまして、教育の諸課題を共有化して、課題解決していきましょと。それは学校、教師、保護者、地域、我々行政関係者が同じテーマで議論し合って解決していきましょとということで、教育推進会議を掲げております。26年度は3つのテーマで初年度という形でやったんですが、今年度は7月と10月に1つテーマを設けて議論して、テーマを絞り込んだ後に、ワークショップ形式で、参加している方々と一緒に課題を解決するという手法を取り入れた教育推進会議を考えております。

そういうことがありますので、区長の最初の話にもありましたが、できればこの総合教育会議と教育推進会議を関連性を持って進めていただければ、教育関係者にとっては効率よく課題が共有でき、解決できると思っておりますので、今お話が出ましたテーマの中で関連して進めていただければ大変ありがたいと思っております。

以上です。

保坂区長 それでは、議論をまとめたいと思いますが、澁澤委員長からは、冒頭から最後に至るまで、教育と一くくりに言いますけれども、この非常に不安定な、しかも変容の速い現代社会の中で成長している子どもたち自身がどこに座標軸を求めて、どちらを見て歩いていったらいいのかということは、実は大人自身もなかなか確たる回答を持ち得ない部分も多いわけで、そういうところについて、まさにこれからの学びの力とか、生き抜くという説明がありました。それはサバイバルなのかもしれないし、もっと生き生きと輝くという積極的なところかもしれませんけれども、いずれにしても、子どもたち自身が成長、発達の中で物事を知り、いろんな試行錯誤をしながら、人格を形成し、そして、多分20年前、30年前にはなかった社会の変容が現在あるわけで、これからも変わっていくだろうという中で、以前も新しい学力観という話がありましたけれども、現在の世田谷にふさわしい、世田谷らしい と言うと少し狭義かもしれませんが 学びとは何なのかというところをこの会議では、そもそも論ですけれども深めていく必要があるんじゃないかということが出たと思います。

そしてまた、井上委員から、地域に即した世田谷の教育の現場で、そしてまた、世田谷の地域の特性も生かしながら取り組んでいく、そこを忘れずにというか、そこに軸足を置きながらの議論ということだったと思いますし、永井委員からも、さまざまな経験をした保護者がいらっやって、教育に関して多分意見は1人1つか2つの、あるいはもっと多いかもしれませんが、教育論ということになると、保護者の方も大変いろんな価値観をお持ちだということです。

それから、原委員から何度もございました自己肯定感、自己有用感については、「せたホッと」ができるときに、世田谷の小学校5年生と中学2年生、合計2600人にアンケートをとったところ、自分が好きであると答えた子どもは、5年生の場合は全体の5割、中学2年になるとこれが3割に減っている。誰かの役に立っているか、人から必要とされているかは、小学校5年生で4割、中学校2年生で3割に減ってしまうわけで、逆に7割は人から必要とされていないとか、自分が好きとは言えないとなっているわけで、これはやはりゆゆしき問題だろうと。この割合はどうしたら上がっていくものなのか、恐らく学力や生活力ということ以前に、ある種、そういった脱力状態というんですか、前を見て、体を起こして動こうという手前のところで沈んでしまっている子どもたち、若者たちにも通底するわけですけれども、そこについては非常に大きな課題があると思います。恐らく子どもたちは非常に未来を捉えますので、子どもたち特有の問題だけではなくて、これに対す

る回答は、澁澤委員長がおっしゃった未来を見据えた学びというものをどうつくり上げていくのかということにまた立ち戻ってくるだろうと思います。

たくさんの議論が出ましたけれども、総合教育会議は今いただいた御意見を参考にしながら、次回はテーマを設定させていただきます。そのテーマを深めるのと同時に、教育推進会議でワークショップ形式などもうまく使いながら、場合によっては1つのテーマを分岐させて、幾つかに分けて、少しディスカッションしてみても、またまとめるということもやっていきたいと思います。

きょうは総合教育会議の第1回目ということで、事務局にはある土台をつくったところまで準備をやっていただいたわけですが、世田谷区としては、今後はぜひ広く区民の皆さん、区外の皆さんにも開きながら、教育委員会の皆さんとともに総合教育会議をやっていきたいと思います。

以上で第1回世田谷区総合教育会議を終了したいと思います。傍聴の方もありがとうございました。

午後4時58分閉会